学　会　記　事

第5回上越胆石胆汁酸研究会

日　時　昭和62年9月5日（土）
午後3時より
会　場　東映ホテル（2階 朱鷺の間）

一　般　演　題

1）右下側臥位径口胆嚢造影法2361例の経験

○新妻　伸二（県立がんセンター新潟病院）

50.8. より61.12. まで，径口胆嚢造影剤を使用し，右下側臥位，水平X線束，セオスニン筋注による胆嚢造影を2361例におこなったので，その結果を報告する．

1.　胆嚢収縮により逆流した造影剤で，左右の肝内胆管まで造影されたのが，74.3%．総胆管が造影されたのが92.2%で，径口法で胆管の診断が可能となった．

2.　この体位で大腸などの障害陰影との重なりがなくなった例が54.5%，立位の時重なりの無い例と合計すると94.8%が障害陰影がなく診断が容易となった．

3.　肝内胆管，総胆管などが，径口造影剤で造影されたため，総胆管周辺の疾患の診断に有用であった例は22件であった．

4.　総胆管のスパズムをみる例があり，生理学的に興味あることであった．

2）当教室における最近の胆石症

○福田　喜一・伊賀　芳朗
川口　英弘・吉田　奎介（新潟大学第一外科）
武藤　輝一

過去36年間に経験した1568例の胆石症症例を集計した．男女比は1：1.29．症例数は増加傾向を示し，各年令別に見ると60代，70代の高年令層の増加が著明であった．結石の種類別にみると，全症例ではコ石61.1%，ビ石31.7%，黒色石6.7%，まれな胆石0.5%であり，その推移をみると，近年黒色石の増加が著明で15%を占めるに到った．そこで臨床症状の有無，胆汁中細菌培養陽性率を各結石間で検討した．黒色石は無症状例が62%と他石（コ石27%，ビ石16%）に比し多く，細菌陽性率は33%と低率であった（コ石45%，ビ石82%）．また黒色石は外観形態が多種であり，赤外線分析にてもその分類が困難な場合がある．成因，病態等不明な点が多い黒色石が近年著明に増加し，治療上からもその解明が望まれる．

3）当院における無石胆嚢炎症例の検討

○笹川　哲哉・峯村　正実
渡辺　雅史・堀　聡彦
杉田　健一・味方　正俊
渡辺　裕・大貫　啓三（立川総合病院内科）

昭和57年1月から昭和62年7月までに当院で経験した無石胆嚢炎は14例で，男女比は1対1，年齢は25才から86才，平均62才であった．背景因子としては他疾患での手術後，高血圧，肥満，慢性関節リウマチ，狭心症がみられたが6例では不明であった．症状は右季肋部痛，発熱が主で肝機能検査上特異な点は認めず，超音波検査では胆嚢腫大，胆嚢壁肥厚，胆嚢内泥状物の存在等を認めた．14例中緊急手術は2例，待期手術1例，死亡例1例で他の10例は保存的治療にて改善をみた．従来から本症は重篤な病態下で発症することが多く，死亡率も高いとされていたが，自験例では背景が不明の軽症例も多くみられ，超音波検査による早期診断と，保存的治療の早期開始が重要と考えられた．

4）磁器様胆嚢3例の検討

○大隅　雅夫・正田　裕一
児島　高寛・宝田　彰
宮田　展宏・細内　康男
佐野　義明・真木　武志（群馬大学第一外科）
新井　和男・石崎　政利
正田　弘一・竹之下誠一
長町　幸雄

我々は比較的稀とされている磁器様胆嚢の3例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告した．症例は61歳，67歳，74歳の女性で，それぞれ上腹部痛，集団検診における右上腹部石灰化陰影，食欲不振を主訴に来院し，腹部単純撮影で右上腹部の石灰化陰影を認めた．3例ともに胆嚢管の閉塞，結石の充満を認めた．切除胆嚢の軟線撮影で筋層に一致した石灰化層が認められた．

我々の検索しえた本邦報告例は115例であり，年齢は22歳から82歳で男女比は1：4.8であった．胆嚢管閉塞を認める症例61例（52.6%）であり胆嚢結石は66例（55.2%）に認められた．また胆嚢癌の合併は14例12.1%で胆石保有者の約0.85%に比べて高値であった．

5）胆嚢腫瘤性病変の2例

○朴　鐘干・山本　賢
斉藤　健吉・田代　成元（田代消化器化病院）

術前検査にて診断が困難であった胆嚢腫瘤性病変を2例経験したので報告する．症例1は39才の女性，上腹部